

# 沖縄協会だより

2024.12

No.33



沖縄平和祈念堂美術館  
所蔵絵画紹介

小阪正次 作

## 壺屋の里 号数：F100

小阪正次 大正8年(満州・奉天生まれ) 岡山県出身

画歴：明治大学卒。安井賞展・毎日現代展出品、現代洋画精鋭選抜展金賞、同銀賞、同記念大展入賞。  
新象作家協会創立会員。

制作意図：沖縄に旅する度に私は壺屋に直行する。抱瓶やカラカラに対する造型的な興味もさることながら、何よりも壺屋にこそ凄惨な戦争を耐えぬいた沖縄の人びとの平和を願う心が焼物の一つ一つに感じられるような気がするからだ。壺屋の里には昔ながらの魔除けの獅子をのせた赤瓦屋根の家並が渋い色彩を止めてひっそりと佇んでいる。ここにはやはり沖縄の心があると思うのである。

額サイズ：縦×横×厚【153×186×9cm】

(昭和60年1月19日寄贈)昭和)

沖縄協会は、沖縄が本土に復帰するまでの間、各種の援護活動を行った特殊法人南方同胞援護会(昭和31年～47年5月)の後を受けて、昭和47年9月20日に設置された内閣府所管の公益法人です。新たに設立した財団法人沖縄協会は、南方同胞援護会の実績と経験を活用して、沖縄の振興施策に積極的に協力し、平和で豊かな沖縄県の建設に寄与してまいりました。平成23年(2011)4月1日、沖縄協会は内閣総理大臣より公益財団法人として認定を受けて「公益財団法人沖縄協会」として新たな一歩を踏み出しました。これからも、沖縄県の健全な発展と幸福な社会形成に役立つ事業を行いながら、沖縄平和祈念堂を管理運営することで、平和で豊かな沖縄県の建設に貢献していきます。



## 公益財団法人沖縄協会主催講演会要旨

### 沖縄の豊かな植物資源

～一般財団法人沖縄美ら島財団勤務47年を振り返って～

## 花城良廣氏（前沖縄美ら島財団理事長）

花城良廣氏（前一般財団法人沖縄美ら島財団理事長）  
1950年生。千葉大学卒業。海洋博覧会記念公園管理財団（現一般財団法人沖縄美ら島財団）都市緑化植物園長、常務理事などを歴任。2014年から2024年6月まで理事長を務めた。

2024年10月19日、沖縄協会主催講演会が東京都内で開催されました。花城良廣前沖縄美ら島財団理事長による講演の要旨を紹介します。

ご紹介いただきました花城でございます。

今年6月まで一般財団法人沖縄美ら島財団の理事長をしておりまして、「沖縄国際海洋博覧会」が開催された1975年の翌年、その会場跡地を国営公園として整備することが閣議決定したことを機に、沖縄美ら島財団の前身である「公益法人海洋博覧会記念公園管理財団」が設立されました。以降、国営沖縄記念公園の管理運営を行うほか、亜熱帯性動植物や百里城等に関する調査研究、普及啓発等の事業を実施してきました。そして2012年にこれまでの公益法人から「一般財団法人沖縄美ら島財団」に改組しました。私はこれまで47年間、国営沖縄記念公園における海洋博覧会地区や百里城公園の管理運営等にかかわってきました。この度は、私がライフワークとして調査研究してきた沖縄の植物資源についてお話ししますが、加えて皆さん

の関心高い「百里城復興の近況」についても話することにしました。

### 「百里城復興」

一般に日本の「公園」という名の付くものは大きく分けて国営公園、国立公園、国定公園、国民公園という4つの種類があり、一般財団法人沖縄美ら島財団（以下「財団」）が管理する海洋博公園、百里城公園、美ら島水族館は国営公園内に設置されています。国営公園の整備と管理運営の仕組みはちよつと複雑です。例えば百里城公園は、管理区分が国、都市再生機構（平成4年から平成30年）、沖縄県都市公園課、沖縄県文化財課、那覇市文化財課に分かれており、それぞれが般競争、指定管理者選定によって管理者が異なってきました。管理指定を受けた財団は、一般法人と異なって入館料等から得た収益は百里城基金の積み立てや公園機能の向上等に関する調査研究、普及・啓発事業の拡充など地域社会に貢献するために使用しています。このような中、2019年に百里城の管理・運営が国（都市再生機構）から沖縄県に移管されましたが、同

年10月に発生した火災により正殿・北殿・南殿が全焼しました。その後直ちに沖縄総合事務局では「百里城復元に向けた技術検討委員会」が設置され、百里城復元に向けた取り組みを推進しています。復元に当たっては、このような火災を二度と繰り返さないよう、防災・防火対策の強化（スプリンクラーの新設、屋内消火栓の変更など）、平成の復元以降に明らかになった知見やその後の研究成果を復元にどのように反映すべきか等について検討されています。直接現場を管理する財団は「防火マニュアルに完成は無い。訓練に終わりはない。」と標榜し、目指すは世界レベルの防災危機管理体制を構築することが財団の責務であると考えています。また、平成復元時は不明であった弁柄漆塗料の顔料については、古文書などから久志間切弁柄くしまぎりべんがらとしていことから、その後の研究で久志周辺の水辺に存在する鉄バクテリアによって生成される顔料である可能性が高いことがわかり、この顔料による往

時の正殿の色の復元を目指して生産方法の検討や試験などを行っています。その他、瓦文様、扁額の色、正殿と北殿間の建屋など新たな知見として取り入れられています。そして現在、復元過程の公開や観光振興など地元ニーズに対応した施策を推進する「見せる復興」の環として、正殿の整備状況を間近で見学できる素屋根見学エリアを公開しています。このように国・県財団が連携して2026年の新たな正殿の完成に向けて着々と復興が進められています。

「沖縄の豊かな植物資源」  
私が中学まで暮らしていた鳩間島（はとまじま）は往時人口約400人の小さな島でしたが、住民は先人の残した資源を無駄なく使いながら生活していました。島に住む人、風、土、水、植物、太陽エネルギーなどそれら全てが資源です。その資源のひとつ「植物」に注目しましょう。

人間は野生植物の中から有用なものを採集する生活から栽培することで人間活動での多様な用途と効率的に利用するようになりました。しかしながら近代社会ではバイオテクノロジーなど科学の進歩に伴って伝統的に伝承されてきた先人たちの知恵、すなわち「民族植物学的研

究のデータが失われつつあることは憂慮すべきことです。沖縄には古くから多くの潜在的有用植物があります。「おもろそつし」(1534年から1623年にかけて首里王府によって編纂された歌集)には衣食住とつながりの深い24数種類の植物が記録されています。「ここで挙げられている植物は沖縄で生活するために絶対必要な植物であり残してください」という先人たちからのメッセージではないかと思えます。このような多様性に富んだ沖縄の植物をどのように残していくのか、遺伝資源の保全は急務であります。特に島野菜(沖縄県の伝統的農産物)などの収集と保存は重要課題です。財団では沖縄の各地に残っている島野菜(在来野菜)を収集し栽培保存や種子保存などを行うほか琉球食文化研究の一環として島野菜を用いた琉球王国時代の料理の再興並びに利用開発を行うております。

次に、絶滅危惧種となっているリュウキュウベンケイを育種することで新しい切り花を作るなど、新しい沖縄のオリジナル商品の開発、産業振興につなげる研究開発を行っています。また種の保全だけでなく、沖縄に自生する植物(栽培植物を含めて)の成分分析による機能性に関する研究や内外の有用な植物の導入開発によって産業振興への貢献が期待されます。今後の地球環境、エネルギーなどの課題に対して、沖縄の気象環境を利用したバイオマス植物の生産や微生物(菌

根菌などを活用した栽培技術開発に関する研究などにも大いに注目していきたいと思えます。

最後に、沖縄は東洋のガラパゴスと言われるほど生物多様性が高く、植物区系を見ると沖縄は東南アジア区系に属していますが、今後は地球温暖化の影響によって東南アジア区系・マレーシア区系・メラネシア・ミクロネシア区系の三つの区系の交差点となる可能性があります。私は、この生物多様性の高い沖縄で東南アジアや太平洋地域の植物資源の調査研究ができるように国立自然史博物館を作るべきだと思えます。本日のお話はこれで終わりますが、皆様も先人たちが遺してくれた沖縄の有用植物の情報をどのようにして現代の生活に役立てるか、ということに思いを馳せてみてください。



花城良廣氏による講演のようす

## 第59次沖縄豆記者交歓事業への協力

沖縄県下の小・中学校より選ばれた豆記者が取材活動や交流活動の体験をおして社会に対する視野を広げ、思いやりのある心豊かな児童生徒を育てる第59次沖縄豆記者団(小学6年生から中学3年生までの児童生徒30人と引率3人、主催：沖縄県豆記者交歓会)が7月30日から8月2日にかけて東京都内で取材活動を展開した。本会はこの取材活動先との連絡調整などに協力した。7月30日、羽田空港に到着した沖縄豆記者の一行は、首相公邸を訪れ、岸田文雄首相(当時)を表敬訪問した。大ホールに整列した豆記者たちは「ていんさくの花」の合唱で岸田首相を出迎え、同席した自見はなこ沖縄及び北方対策担当大臣(当時)が豆記者を紹介した。続いて樋口清美礼さん(南風原町立北丘小学校6年)、大城帆夏さん(沖縄尚学高等学校付属中学校2年)の2人が琉球舞踊「かぎやで風」を披露し、豆記者を代表して比嘉祿さん(名護市立大宮中学校2年)が「取材活動を通して得た発見と感動をひとりでも多くの人に伝えたい。」と挨拶した。岸田首相は豆記者へ激励の言葉をかけ、記念撮影を行った。続いて内閣府沖縄担当部局がある中央合同庁舎8号館に中嶋護審議官を訪ね、取材活動を行った。質疑応答では、伝統文化の保護やサトウキビ農家が抱える問題など、様々な分野について質問が出された。中嶋審議官は、これらの質問に対して沖縄担当部局が取り組んでいる対策について映像による資料を使って丁寧に答えた。7月31日、豆記者一行は世田谷区役所を訪れ、保坂展人世田谷区長、知久孝之教育長を表敬訪問取材し、「せたホット」などについて質問が出された。区議会議場では、おぎのけんじ区議会議長、平塚けいじ区議会副議長、林勝久区議会事務局長を訪問取材し、世田谷区の記念品を受け取った。続いて同区立郷土資料館を見学し、熱心な取材活動を行った。また、夕方には在京の沖縄県出身大学生と懇談会を行った。8月2日、赤坂東邸を訪れ、秋篠宮皇嗣同妃両殿下にご接見を賜った。豆記者を代表して譜久原葵さん(沖縄尚学高等学校付属中学校2年)が挨拶し、豆記者一人一人に両殿下から温かいお言葉をいただいた。同日午後、無事に4日間の活動日程を終了し、那覇空港で解団式が行われた。

★第32回祈りと平和の集い

8月15日、沖縄宗教者の会主催による「第32回祈りと平和の集い」が沖縄平和祈念堂で開催された。この催しは県内にある各宗教が共に手を携え、宗教者が心ひとつになつて「沖縄から世界にひろげよう平和の祈り」をスローガンに、戦没者の鎮魂と永遠の平和を祈る沖縄の心を象徴する霊地・聖地と言われる摩文仁にそびえる平和祈念堂から祈りを発信することを目的に行われている。コロナ禍で中断はあったが今回で32回目。プログラム順に各宗教や宗派独特の祭事が行われ、黙とうは代表者が打ち鳴らす鐘の音、三回にあわせて行われた。三つの鐘の音にはそれぞれ意味が込められており、第一の鐘は戦没者慰霊の祈り、第二の鐘は震災犠牲者ならびに紛争犠牲者と被災者への祈り、第三の鐘は世界平和に対する祈り。堂内に鐘が鳴り響くなか参列者全員で祈りを捧げた。



参列者全員による黙とう

★沖縄ライオンズクラブの清掃活動

8月31日、沖縄ライオンズクラブ（上原仙子会長）の皆さん18人による清掃活動が行われた。同クラブの皆さんには継続して清掃活動に参加いただいている。今回の清掃は、平和祈念堂宇前庭にある歴代ライオンズクラブ国際協会337-D地区地区ガバナーが記念植樹をされたホウライカガミの生垣周辺で行われ、清掃後には清浄な空間が広がった。



沖縄ライオンズクラブの皆さん

★ライオンズクラブ国際協会337-D地区地区ガバナーによる記念植樹

9月5日、ライオンズクラブ国際協会337-D地区の宇都聖地区ガバナーと新里正雄前地区ガバナー一行による地区ガバナー公式訪問の記念植樹が堂宇前庭で行われ、両ガバナー含む14人の会員が参加した。植樹に先立ち参加者全員で黙とうを行い、沖縄戦全戦没者へ鎮魂の祈りを捧げた。次に両ガバナーと代表2名によるホウライカガミの植樹、ついで「平和の鐘」

の献鐘、堂内にて平和祈念像を参拝した。ライオンズクラブの皆様には、平和祈念堂開堂当初から「平和の鐘」「まぶい灯」の建設、「平和の鐘」鐘楼の外装補修、更には「平和の森」緑化計画による植樹や毎年継続しての清掃活動など、平和祈念堂の整備充実と環境保全に多大なご尽力を賜っている。



ガバナー公式記念植樹一行

★「国際平和デー」に全国で平和を祈る鐘打式

9月21日、世界連邦日本宗教委員会を介して国際平和デー日本委員会より、同21日の国際平和デーにあたり国連本部で行われる世界の平和と連帯を祈念する式典に合せ、各界各派の垣根を超えて全国各地において一斉に鐘等を鳴らす行事への協力依頼があり、当協会では趣旨に賛同して、平和祈念堂「平和の鐘」の鐘つきを行った。式典に合せ正午より世界平和を祈念して新垣昌頼当協会専務理事が、平和祈念堂常例の7回鐘をついた。

沖縄平和祈念堂美術館

沖縄を描く：沖縄をモチーフにした作品 8

ピナイサーラの滝 立川広己作

立川広己 昭和24年 東京都生

画歴：1972年武蔵野美術大学卒。85年上野の森絵画大賞展佳作賞・上野の森美術館『時の停止』F80号買上・フジテレビ「朝のテレビ美術館」作品紹介、90年自由美術展佳作賞、91年現代洋画精鋭選抜展第20回記念大賞展金賞、93年安井賞展出品、94年全国花の大賞展招待出品、95年『華宴』F150号が経済産業省買上、2006年現在の視展招待出品。ヨーロッパ・北京など取材旅行5回、新宿伊勢丹他全国主要デパートにて個展多数。現在自由美術協会会員・日本美術家連盟会員

制作意図：沖縄県西表島(船浦)にある神が宿る聖なる滝「ピナイサーラの滝」の荘厳さと神秘さに感動し、その雄姿を朝もやの幻想感とあわせて優雅に描いた。

額サイズ：F30 縦×横×厚【108.2×90.2×8.5cm】

(平成20年2月20日寄贈)

